『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第16巻 第3号 2014年2月 153頁～166頁

〈研究ノート〉

# 都市を生きる〝神様〟
## ――二、三の古社に訪問（おとな）えば――

千葉 貢

### 一、はじめに――地域文化の尊厳

「地域文化」は暮らしや生業との関わりによって実利的に、かつ精神的に創造され、日常的に洗練されながら、永年に亘り息づいている有機的な具象である。だから、決して虚栄や装飾品ではない。具体的には、当地の生業に伴う手段や方法、場所、風土、気候、環境などの地域的な特異性はもとより、それに参加したり実践したりする人々の年齢や性別などの違いによって独自性を創り出し、その名称や具象が地域によって異なるだけであって、「地域文化」の精髄や結実に変わりはない。自らが生まれ育った場所や地域から現在に至らしめた過程を振り返り、体得してきた数々の風俗習慣に等しい〝文化〟や、息づいている〝教養〟を内省し、考察してみれば「地域文化」の効用や影響について認識するに違いない。生まれて育つということは、その〝地域〟との関わりや、地域の人々との触れ合いを意味する。生きているという事実をして〝文化〟の受容であり、〝教養〟を紡ぐ過程であると言えよう。改めて自らが育った「地域」を歩いてみれば、〝文化〟の尊厳や効用を実感することであろう。

人は人を育み、人に育てられる。決して、一人で人になるわけではない。身近な〝文化〟や、身につけた〝教養〟の充実は、多くの人々を介在し、関わりながら洗練されてきた、歴史的にして社会的な所産である。先師や先人たちの営みのなかに、新たに後発の自分が加わることによって温故知新、自らの血脈や位相を承知し、歴史的にして社会的な位相を自覚する。今は亡き人々をも含めた多くの人々と連携、連帯しながら生きているという、意識の継承や活動の具現こそが生き抜く〝教養〟である。そうした意識や活動が有意義な生存を可能にし、多様な人生を創造する〝地力（じりき）〟である。各自の〝地力〟は、「地域文化」と共に醸し出され、蓄積される潜在的な原動力であり人間性である。

人は理由を抱いて生まれ、予め過不足なく知・情・意を備えた全人として生まれるのではない。多くの人々と関わり、多くの動物や植物を含めた天然・自然とも触れ合いながら社会的な規範、事の善悪や美醜、礼儀作法から身体感覚などを身につける。それは不文律の〝文化〟

を日々体得し、人格を涵養したり個性を育成したり、紆余曲折を経ながら人生という長い歳月を歩むのである。つまり、人生を探求するという日常の営為と共に、身近な〝文化〟に励まされ慰められながら、教材に等しい年中行事や通過儀礼などの機会に伴う、貴重な経験に応じて醸成される〝文化〟の効用を見逃すわけにはいかない。

人生にとって必要な〝教養〟は、学校という場所や授業の教材だけで学び、教えられるわけではないということである。人は現代を生き抜くために、通時的にして共時的な観念を創り、共感覚や価値観を生み出す。その礎に宿っている「地域文化」の滋養や、育まれた命を愛惜し、哀れを知る心を慈しむことが、どうして未来を生き抜く妨げになろう。例えば、日進月歩の発展や開発に心血を注ぎ、絶え間なく創出される多種多様なモノの機能に依存し、無意識に追従し続ける日常生活を営んでいるであろう。無常の命に包まれた〝哀れ〟を知ることが、モノの氾濫による人工的な環境の拡大化や、人間の無機質化現象を抑制することになると思うのだが、どうだろう。それでも、限りなく豊かなモノへの憧れや、入手への欲望を絶やすことはないだろう。挑み続ける人間の観念や生態をして〝哀れ〟に思われてならないのだが、どうだろう。人は生きることに拘泥し躍起となるあまり、お互いに支え合いが必要だという弱さや必然を忘れてはいけない。

人生の妙味を体得した先人や先師は、「世の中は持ちつ持たれつ立つ身なり人ってえ文字を見るにつけても」「駕籠に乗る人担ぐ人そのまた草鞋を作る人」「寝ていても団扇の動く親心」「転寝も叱り手のない寒さかな」「親の恩歯が抜けてから噛みしめる」「散る桜残る桜も散る桜」などという戯れ歌を詠み、人情の機微を伝えている。そこには共生共存の尊厳や、やむを得ない役割分担の受容、必然に対する了解などが読みとれる。かつての〝結・無尽・講〟などによる農作業から冠婚葬祭、屋根（家）普請、道や橋の普請、そして富士山詣、お伊勢参りに至るまで、隣り近所を含めた地域の人々との共同や協働による、維持継承だったことをもの語っている。筆者の家郷（岩手県一関市花泉町）では田植えを終えると〝早苗ぶり〟や〝馬鍬洗い〟と称して、近隣の人々と自宅で慰労会を行ったり、馴染みの温泉地へと〝湯治〟に出掛けたりして疲れを癒やし、親睦を深めることもあった。「和を以て尊しとなす」という教えは、農山漁村に限らず古今東西に亘り重要な処世術である。「ゴミ0運動」に呼び出されたり、子どもたちの交通安全のために、通学路の途中にある横断歩道の道ばたに立ったり、防犯の夜まわりに参加したりする地域ぐるみの取り組みが盛んである。ボランティアと呼ばれる活動も、事や地域に限らず、多くの人々との関わりによって導き出される暗黙の連携や連帯感、紐帯意識などの具現であり、共同や協働の効用である。確かに「壁に耳あり障子に目あり」「親の泣き寄り他人の喰いより」「人を見たら泥棒と思え」などという諺もあるが、「人の振り見て我が振り直せ」「渡る世間に鬼はない」「情けは人のためならず」「袖すり合いも他生の縁」などという諺もある。

また、〝夜に爪を切ると親の死に目に会えない〟〝夜に口笛吹くとお

化けが出るぞ〟〝家の敷居は跨ぎ、畳の縁（へり）は踏んではいけない〟などと戒められてきた、「～はいけない」という禁忌の教訓もある。これらを俗信や悪習、あるいは迷信だとして一蹴しがちであるが、それでいて今でも四や九を好まない人が多く、末広がりだという「八」やラッキーセブン（7）を好む。あるいは「葦（あし）」を「吉（よし）」に、「する」を「当たる」と言い、「終わり」を「お開き」と言い換える。こうした言葉に限らず、物事によっては「不吉だ」「縁起でもない」と嫌悪し、「縁起を担いで」「縁起もの」を歓迎する。だから「縁は異なもの味なもの」と言われる所以である。

例えば、日本各地に「パワースポット」と呼ばれる場所があり、「縁結び」や「学問」の神様が祀られ名所になっている。参拝者は商売繁盛、家内や交通の安全、世界平和なども合わせて祈願することが多い。私もひたすら祈ること、願うことが多く、叶えたいと思うことも人後に落ちない。まさに「神様も弱り果てて絵馬の数」（江戸時代の川柳）という欲望に満ちた状況を捉えた苦肉の一句が伝えられている。それぞれ願い事を唱え、御利益を期待する人々の心情、参拝に伴う仕草や所作、作法を含めた言語行動が、その人を形成している教養であり、息づいている文化なのだということである。

教養や文化は、風習や習慣の別称に等しい。言葉の言い換えや「縁起」にこだわる風習は、言霊（ことだま）（言魂）信仰と呼ばれる精霊崇拝主義（アニミズム）の神髄を継承している証左である。科学的な根拠がなく迷信だ、と毛嫌いするならば、儀式の席上で挨拶される来賓の胸花を紫色や緑色、あるいは黒色にし、結婚披露宴の祝辞のなかに「折れる」「切れる」を用いて「終わり」と言い、冥土への旅立ちを飾る「白装束」を色彩豊かな洋装に、いずれも近代的な思想や科学的な根拠に基づき開発を促し、進歩発展させても良さそうなものなのに、今も猶昔ながらの仕来りだという、〝古式ゆかしく厳かに〟とこだわるのは何故なのであろうか。しかも、最新の機器を完備した「○○会館」「△△ホテル」「□□センター」と呼ばれる洋風や和風の、立派な施設で挙行されるというのに、非科学的だという風習や、旧態依然と思われがちな伝統に迎合するのはどうしたことであろう。何かにつけて「科学的な根拠を示せ」「合理的な理由は？」「客観的に説明せよ」などという理窟を展開し、科学や合理性（化）を追求する、理性的な現代人であると自負しがちな私たちなのに、先代からの風習に固執したり追従したりするのは何故なのであろうか。それは仕来りと称されるもの事が、いずれも洗練されながら有機的に存在しているからなのであろう。今に伝えられた現実と関わりながら仕来りを体得することが、未来へと生きる私たちの日常であり、必然なのではなかろうか。万事は求め合いながら連綿と連なり、そして結ばれており、総合的に息づいているという証しなのではなかろうか。

人は自然の恵みに支えられてきた。田舎の人も都会の人も自然に依存しながら生きながらえてきた。だからなのか、「お互い様です」という互恵互助や共助の精神を養い、「御陰様です」という挨拶となり、共生共存の生き様を促されてきた。さらなる人の英知に期待するだけ

ではなく、今に伝えられ、すでにある「文化」と関わりながら、自らを愛惜することが無常の世を生きる私たちの責務であり、お互いに頼り合う紐帯意識を強化する秘鑰なのではなかろうか。そのためにも、御為ごかしの言葉による誤解や、〝高品質、高性能、多機能〟などと繰り返され、〝モノ〟の消費に駆り立てられる欲望や幻想、錯覚、過度な依存などから自らを解放し、伝統に裏づけられた古典の存在を認め、潜在的な能力や個性を引き出そうという試みを怠ってはいけない。それでいて、「御一新」以来の「近代化」を盲信し、安易な進歩発展の「強迫観念」に自惚れてはいけない。[注1] すでに永年に亘って紡いできた文化が存在し、伝統の息づいているところは、中山間地や限界集落などと呼ばれる農山漁村や、新たな住民によって形成された都市都会のなかの、いずれも〝地域〟だということである。そこには古今に亘る暮らしがあるのだから。

## 二、〝都市〟という地域

### （1）唱歌「村祭」を口ずさみながら

一　村の鎮守の神様の
今日はめでたいお祭り日
どんどんひゃらら　どんひゃらら
どんどんひゃらら　どんひゃらら
朝から聞こえる笛太鼓

二　今年も豊年満作で
村は総出の大祭（おおまつ）り
どんどんひゃらら　どんひゃらら
どんどんひゃらら　どんひゃらら
夜まで賑わう宮の森

はじめに「村祭」[注2]と題する文部省唱歌を掲げてみた。御存知の方も多いであろう。「鎮守の神様」や「お祭り日」は村だけにあって、都市都会と呼ばれている地域にはないのであろうか。

確かに「平成の大合併」に伴い、〝村〟の数が軒並み減少したのだから、[注3] 新たな名称の町市の増加に比例して「町祭り」や「市祭り」という総称に相応しい〝催しもの〟や、「都市都会祭り」とでも呼びたくなるような〝イベント〟が増えたことであろう。いずれの〝催しもの〟も〝イベント〟も多くの参加者を得て、大いに賑わいを見せていることであろう。それでいて唱歌「村祭」を歌い覚えることはないだろう。「村の鎮守の神様」は、地域の人々によって祀られ、祭りは地域の人々の繋がりによって営まれている。そこには氏子と呼ばれる人間関係や役割りに伴う生態系が息づいている。従って、「祭り」は「神を祀る」地域の人々の営為であり伝統である。町や市の行政が企画したり主催したりする〝催しもの〟や〝イベント〟とは性質が違う。なぜならば、そこには願いを秘めて祈りを捧げる「鎮守の森の神様」が存在しないということである。

祭祀祭礼の維持や継承は、〝神人一体〟の象徴であり、人間と自然の融合である。人間と神、そして自然との三位一体というべき共同体である。その〝神〟とは、言うまでもなく〝八百万（やおよろず）〟の「自然神」である。目に見えない〝神様〟だけに、喩えて言えば「孤独は山になく、街にある。一人の人間にあるのではなく、大勢の人間の『間』にあるのである。孤独は『間』にあるものとして空間の如きものである。（中略）孤独を味わうために、西洋人ならば街に出るであろう。ところが東洋人は自然のなかに入った。彼等には自然が社会の如きものであったのである。東洋人に社会意識がないというのは、彼等には人間と自然とが対立的に考えられないためである。」[注4]という「孤独」に限らない。神や祭祀祭礼、儀礼もまた農山漁村だけにあるのではない。人口の多寡で括って出来た町や市のなかにあっても、従来通り地域の行事として、神様をいただく祭儀として継承されているということである。市町村合併が「財政の健全化」や「行政事務の効率化」「住民サービスの向上」などという謳い文句を掲げて実施されたものの、果たして口実通りに実現したのかどうか、検証して然るべきであろう。私は学校にて、民主主義を支えるのは「主権在民である」と教えられたのだが、市町村合併の是非を尋ねられたことはなかった。これは「そもそも議会という立法府の力ですべてが統治できると思っていたことが間違いだったのであり、実際に統治のための多くの決定を下しているのは行政府であるという現実を踏まえて、この現実に対応する策を講じなければならない。」という。だから「住民投票制度のような強化パーツが増えていけば、社会はより民主的になっていくだろう。だが、いつかどこかの時点で『民主主義』なるものが達成されるわけではない。民主主義は、常に来るべきものにとどまる。けれども、いまは民主主義の名に値する民主主義は存在していない。だから、民主主義の実現を目指さなければならない。民主主義はいまもなお、来るべきものにとどまっている。」[注5]という指摘や見解に共感を覚えた。これからは言葉の真意を理解するためにも、徒に理想や願望を夢想したり、期待を抱いたりする惰性や幻想からの脱皮を目指し、来たるべき日を迎えるための批判や批評、試行、追求などが必要であるということを教えられた。因みに、宮澤賢治は「永久の未完成、これ完成である」と記している。[注6]だからなのか、民主主義は「来るべきもの」であっても「完成」しないのであろう。

斯くして市町村合併は実施された。市町村が合併して新たな名称と共に町や市となり、役所の場所が移動したり組織内の名称を変更したりと、今でも行政や財政の「改革」に余念がない。その「改革」によって地方交付税や人件費の削減などの効果を発揮したであろうが、合併推進の口実通り「住民サービスの向上」に至り、住民の義務や権利が効率的に、且つ合理的に果たせるようになったのであろうか。例えば、村道が市道に格上げされたからと言って、直ちに道幅が歩道付きで拡張され、交通の便が進歩し、安全が開発されたわけではないだろう。それまでの村や町が運営していた上下水道が、市営に移行したからと言って貯水量が増えたり、汚水処理能力が急速に改善されたりするわ

けでも、村町民税が市民税になって、料金や負担が軽減されたわけでもないだろう。ましてや例年通りの「村祭り」も一緒に合併し、「お祭り日」を変更したり内容が近代的になったり、お祭りの趣旨が発展したり改革されたりして、「お祭り」そのものが合理化され便利になったというわけでもないだろう。むしろ「鎮守の神様」を不在にして、「市民参加」を謳う〝イベント〟や〝催しもの〟が増えたことであろう。

お祭りは、祭祀祭礼の一環であり全部である。神様を介しての非日常的な儀式であり、感謝と願いを込めた儀礼である。森羅万象との共生や共存を余儀なくされている人間の、真摯な処世観であり謙虚な受容である。唱歌「村祭」の歌詞ではないけれども、日本の自然神や八百万（やおよろず）の神々は、閑静な「鎮守の森」のなかだけではなく、都市のただ中に社（やしろ）を構えて鎮座しており、雑踏が行き交う街角などにも祀られているという伝統を目の当たりにして、その所在に関心を寄せ由来などを繙いてみたい。

## （2）東京・銀座の〝村祭り〟

時世時節は流れて暮らしに変化をもたらしてきた。第二次産業（工業を主体に）の興隆に伴い、それを補完し助長するかのように第三次産業（商業を主体に）も多様化した。第一次産業である農林漁業からの人口移動によって第二次産業や第三次産業の労働力を担い、一層の進展を支えてきた。その活動の拠点が都市都会と呼ばれる地域である。それは人口の密集によって形成され、生産と消費を繰り返すのに都合のよい場所である。たとえ、かつての市町村が合併によって新たな市町名になり、行政の区域が変更しても、その土地に根づいていた祭祀や祭礼、儀式などの仕来りまでが合併されることはないだろう。仕来りは定期的な習慣に伴う長い伝統によって醸成された〝型〟が、今も猶息づいているということである。その好例を示すかのような〝祭り〟が行われたというので紹介したい。

この記事は、「銀座の氏神　歌舞伎座へ」という見出しのもとに、「東京・銀座周辺の守り神、鉄砲洲稲荷神社（東京都中央区）の例大祭のハイライト『御本社神輿渡御』が3日にあり、法被姿の氏子たちが、4月に新開場した歌舞伎座をバックに威勢よく、神輿をかついで練り歩いた＝写真、鈴木竜三撮影＝。

大型連休後半の初日とあって、銀座は普段の休日以上のにぎわい。氏子たちは大きな掛け声を上げながら、きらびやかな神輿を勇壮にかつぎ、拍手で応える沿道の見物客と一緒に祭りを盛り上げた。」（写真1を参照のこと。[注7]）というように報じられていた。

これは、今でこそ首都・東京とか、中央区銀座などと呼ばれたり、あるいは都市都会にして、地価日本一などと言われたりするものの、その由来や由緒、創始、創建などが必ずしも定かではない祭祀や祭礼であっても、その地の人々、たとえ氏子と呼ばれなくとも、社（やしろ）の創設や創建が何年であっても、祭礼や儀礼、儀式を、その地や社会状況の変遷と共に、長い歳月に亘って継承されているという事実にほかならない（「鉄砲洲稲荷神社」の由来は明確なのであろう）。こ

れこそ伝統の底力であり、時の地元住民たちの団結力が見事に発揮され、その御陰で継承され実を結び続けてきたのだという感慨を抱かずにはいられない。

かつては武蔵の国の一寒村に過ぎなかったであろう当地が〝銀座〟となり、首都・東京になった今でも〝神様〟を祀り、社（やしろ）を守り、祭礼の日に〝神様〟をだしにして神輿をかつぎ、その地の界隈を練り歩く人々がいるというのだから、〝神様〟は確かに都市都会で暮らす人々のなかにも息づいており、都市都会を生きているということである。銀座の〝氏神様〟は、三木清のいう「孤独」と違って「山にも街にもある」ということであり、一人の人間に限らず、確かに「大勢の人間の『間』にある」ということである。だから、祭祀は忘れていても、御祭礼の日を待ちかねていることであろう。

**写真１　東京・銀座の「歌舞伎座」前を練り歩く「御本社神輿渡御」の様子（読売新聞より転載）**

### （3）東京・隅田川の沿岸を歩く

〝神様〟は中山間地の村里や農山漁村の道端だけではなく、都市都会と呼ばれている街角や、繁華街の路地裏にも鎮座しているという事実を目の当たりにして、当地の歴史や歴代住民の思いを偲ばずにはいられない。今でこそビルの一角に祠が祀られ（写真2を参照のこと）、隅田川沿いに首都高速道路六号線が貫き、その高架を斜め下から見上げる場所ながら、排除されたり遠くへと移転を強いられたりされることもなく、由緒ある場所にとどまり、創建当時のままの威厳を保っている。その社（やしろ）は隅田川神社と言い、「隅田川総鎮守、水神社、浮島神社ともいわれ、在原業平の古歌から言問の岡といわれて歴史は古く、隅田川流域の船舶関係者の尊崇を集めた。特に荷船仲間の水神様として崇められ、両国橋の川開き燈篭なども水神尊崇の現れで、現にその祭儀には当神社が当たっている。隅田川が増水した時も沈まなかったことから〝浮島〟の名もあった。海運・運送業者が水神祭に参詣している。」という。続けて「木母寺と同様に昭和五十一（一九七六）年に一五〇メートルほど南西に隅田川寄りに移転。以前料亭〝八百松〟

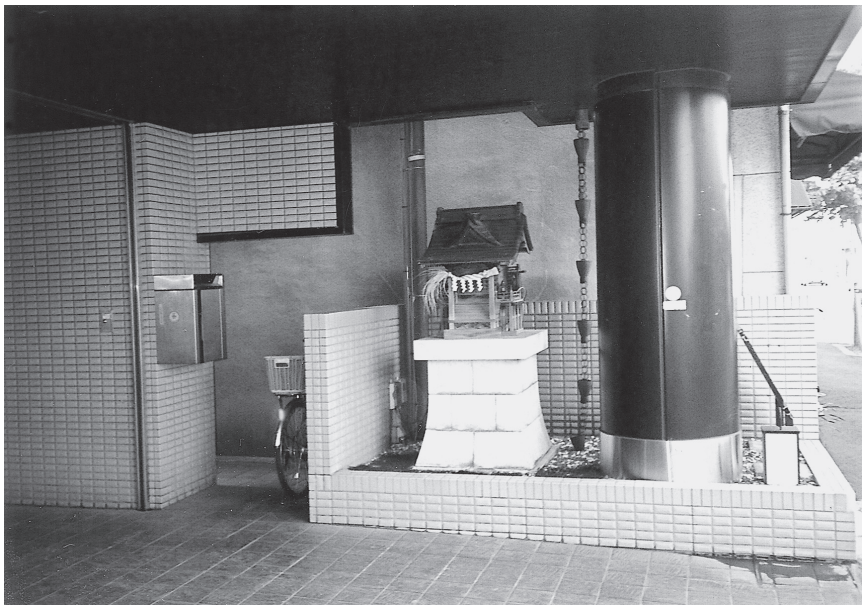

写真２　ビルの出入り口に祀られた“神様”（筆者撮影）

のあったあたりで、〝八百松〟は森鴎外の『百物語』や小山内薫の『大川端』などの小説の舞台にもなっていた。[注8]」ということを教えられた。

さらには、よく見かける狛犬の代わりに石づくりの亀が、やはり「阿吽の呼吸」よろしく向かい合っていた（写真3を参照のこと）。これは「水神様へ石亀を奉納するのは古い風習だったのでしょう。[注9]」という説明が添えられていた。どこへ行っても、その姿の見えない〝神様〟なのだが、神様と崇め、神様をお祀りした人々の一途な思いが、代を超え時を経て今に伝えられ、心の繋がりの証しのように諭され、木立ちに囲まれた本殿に向かって願い事をつぶやき、今後の健勝や安寧を祈らずにはいられなかった。

そして、隅田川神社の門前を右折して東白鬚公園内を通り抜けた。右手に隅田川の気配を感じながら、岸辺の頭上に延びる首都高速道路六号線と平行しながら南下すると、隅田川に架かる桜橋と言問橋の中程に鎮座する「三囲（みめぐり）神社」に至った。鳥居をくぐり抜けると一対の狛犬に迎えられたのだが、すぐ左手にライオンの座像が据えられていた。なぜライオンなのかと疑問を抱きながらも、まずは本殿の前にて神妙

写真３　隅田川神社本殿前の狗犬代わりの“亀”、後方には結ばれた“おみくじ”、そして首都高六号線の高架（筆者撮影）

な面持ちで拝礼した。

境内はそれほど広くはないのだが、本殿を囲むように形も大きさも様々な多くの碑（句碑、モノの慰霊碑、筆塚、顕彰碑など）が点在していた。本殿の裏手を墨堤（ぼくてい）通りが走り、その上を道なりに首都高速道路六号線の高架が南北に貫いており、車による騒音が絶えない。かつては人が行き交い、船が上り下りする様子を眺められたであろう川端の歴史を偲ばずにはいられなかった。時を経た今では、「神様も弱り果てる車の道」なのではなかろうか。社務所にていただいた「由来記」を手に、木立ちに囲まれた境内を歩いた。「由来記」には「三囲（みめぐり）という一風変わった名前の神社。その由来は室町時代初期、近江三井寺の僧、源慶が荒れ果てた社を再興したとき、土のなかから白狐にまたがった翁の像を見つけた。そこに忽然と白い狐が姿を見せて、翁の像のまわりを三周して姿を消したという。この伝説からこう呼ばれるようになった。」とのことであり、この「伝説」をもとに松尾芭蕉の門人・宝井其角（江戸時代前期の俳人で、近江の人）は、「早稲酒やきつねよびだす姥がもと」と詠み、のちには雨乞いをする農民たちの姿を、「遊ふた地や田を見めくりの神ならは」という句をものしたという。この句は安永六年（一七七七）になって、其角の五代目・宝井某が、雨乞いの句碑として建立し、三囲神社の名物とするとともに、「俳諧の霊場」となり、多くの句碑が林立するようになった、という由来や由縁を教えられた。

また、「日本橋の繁華街で越後屋呉服店（三越の前身）を経営する豪商・三井家は、江戸時代初期に三井高利が江戸へ進出する際に、『三囲』にあやかって篤く尊崇した。享保元年（一七一六）には三井一族の者が相談し、三井総元方をはじめ、一族の神として崇敬することとなった。ゆえに、日本橋三越本店の玄関にあったライオン像が本殿の手前、参道左手にある。」[注10]という説明により謎が解け、「三越イコール三井家の守護神」という関係を知った。だから、三囲神社には三井邸から移築したという「三角石鳥居」が、本殿の裏手に、井戸を覆うように据えられている（写真4を参照のこと）。この原型は、京都は太秦の「木島坐天照御魂神社」（通称、蚕の社）本殿左手奥の池のなかにたたずんでいる。いずれも三本の柱に支えられている小型の「三角石鳥居」であり、人が通るものではない。ただ、三本柱の鳥居として

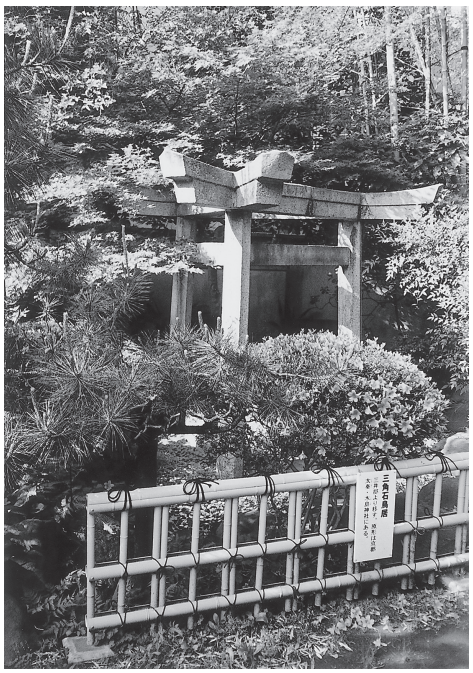

**写真４　三囲神社の本殿裏にある“三角石鳥居”（筆者撮影）**

珍しいので、京都は太秦の「木島坐天照御魂神社」（京福電鉄嵐山線〝蚕の社〟にて下車）か、東京は向島二丁目の「三囲神社」にて一度御覧いただきたい。

さらに三囲神社から小梅小学校前を過ぎて、水戸街道と三ツ目通りが交わる言問橋東交差点に出た。隅田川に架かる言問橋を背にする西前方に、東武伊勢崎線の旧業平橋駅（現、東京スカイツリー駅。また一つ由縁の深い名称が消えた。）の裏手にそびえ立つ〝東京スカイツリー〟が見えた。私は言問橋（『伊勢物語』の主人公と伝えられている在原業平が、この地にて詠んだという一首が、「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」であり、「東下り」の段に見られる。）の方に向かって歩き出し、間もなく左折して「牛島神社」の境内に入った。境内の一角にしてビルの間から〝東京スカイツリー〟が見えた。

牛島神社は「もとは今日位置するやや上流、弘福寺の西隣り墨堤の下にあった。〝牛の御前〟の名前として知られていた。かつてその辺り一帯に海が入り込んでいて、そこに突き出した岬の突端が、寝そべった牛の姿をしていた。〝牛の御前〟は尊称であるとともに、洒落（シャレ）人の江戸市民がかけた牛の御前（みさき）（岬）の音読であった。」と教えられた。また、「境内の社殿側には『なで牛』があり、患部と同じところを撫でると心身快癒の祈願物として古くから信仰されている。」[注11]というのだから、私も早速、そこここと撫でた。当日の疲れの回復を願いながら、その当時流行っていた〝美しい○代〟[注12]を口ずさみ、空を見上げた（写真5を参照のこと）。

**写真５　牛島神社の境内にある“なで牛”と後方に見える“東京スカイツリー”（筆者撮影）**

牛島神社の裏手にあたる北東側には、境内の木立ちに遮られながらも、首都高速道路八号線の高架が隅田川沿いに貫いている。境内には、その名の通り牛が狛犬の役目も担い、学問の向上や受験の成果に御利益があるとのことで、多くの受験生が合格の祈願に訪れ、藁の代わりであろう絵馬を掲げている（写真6を参照のこと）。

また、「この神社の鳥居は三輪鳥居（明神式）の形をとり、その左右にさらに鳥居の半分をくっつけたような特殊なもの」（写真7を参照のこと）で、珍しさもあって何度も振り返り、脳裏に灼きつけた。そして、『風立ちぬ』『菜穂子』『美しい村』『幼年時代』などの小説で知られる堀辰雄が、少年の頃に近く（隅田公園の三ツ目通り側）の住まいから毎日のように訪れ、遊び場にしていたということを瞼に浮か

べ、我が身を振り返ってみた。遡れば、明治の作家・淡島寒月[注13]は、「なで牛の石は涼しき青葉かな」という句を詠んでいる。再び「なで牛」に触れたあと、「牛に引かれて善光寺参り」や「牛の歩み」、「牛歩戦術」などという言葉を思いだしながら家路を急いだ。隅田川沿いの道を巡った日は、真夏の午後から黄昏どきであった。隅田公園のなかを突き抜け、隅田川を行き来する船を見ながら吾妻橋を渡り、地下鉄銀座線浅草駅への階段を下り、改札を経てさらに階段を下りて電車を待った。

**写真６　牛島神社拝殿左手にある“狗犬”と牛の石像、奥にある吊された“絵馬”、結ばれた“おみくじ”（筆者撮影）**

**写真７　牛島神社の“三輪鳥居”（筆者撮影）**

## （4）東京・隅田川沿の〝三社めぐり〟に挑んで——おわりに

私は、四国八十八ヶ所巡りや隅田川七福神巡りではないけれども、都市都会のなかの僅か三社を巡った。そうして、都市都会と呼ばれている街なかにも、お社（やしろ）の創建以来だという歴史に勝るとも劣らない樹齢の木立ちを誇る鎮守の森があり、寄進者の名を刻んだ石垣や、書き付けた木の垣根に囲まれた境内へと鳥居をくぐると、狛犬や手水舎に迎えられる。その先の厳かな拝殿なり本殿なりに向かい合い、神妙な心持ちへと導かれながら、僅かな御賽銭にもかかわらず多くの願い事を祈らずにはいられない。私も含め多くの人々は、その神社の祭神の名はもとより、創祀創建の由来や由緒を知らずに、ただひたすら家内安全や無病息災、商売繁盛、学業成就などを願う。神社によっては縁結びや学問、火伏せの役務を訴え、その御利益を謳い、〝神様〟と崇められ多くの参拝者を集めている。だからなのか、各種のお守りが販売されており、身につけていないと不安になる人が多いのであろう。境内の一角には照葉常緑樹の小枝や、備えられた縄などに、見届けた後に括りつけたのであろう、多くの〝御神籤〟があり、定められた場所にはたくさんの〝絵馬〟が、所狭しと掲げられ吊されている。一枚の〝御神籤〟、一つの〝絵馬〟に託された一人ひとりの哀歓や、悲喜こもごもの一端を反映させている人生の一面にして、〝物語〟の一節のように思われる。それは伝えられてきた風習の神秘的な魅力の具現であり、伝統的な愛着の表出であろう。〝温故知新〟ではないけども、古典に秘められている潜在的な威力や尊厳を、「成長戦略」を謳う〝今時（いまどき）〟に託けたり、科学の進歩を過信したりする「言葉」の真意を問わずに侮ってはいけないということである。一人ひとりの願いや祈りは、人生の彩りを醸し出す心因でもあるのだから真摯であり多種多様である。その意味は深い。

そこで〝願い〟や〝祈り〟を具体的に記す「絵馬」の歴史について繙いてみた。例えば、「現在のような吊り掛け形式の小絵馬奉納の習俗が随所で見られるようになったのは、江戸時代もとくに中期から後期にかけてのことであった。たとえば、『東武歳時記』の二月初午（はつうま）の条に、『絵馬太鼓商人街に多し』とある。そのころになると、絵馬商人が荷をかついで市中を売り歩いたのだ。あるいは、太鼓なども一緒に売っていたとしたら、祭具商人というべきか。そして、神社の祭礼の日には、門前で絵馬が売られた。こうして、人びとは絵馬を買い、絵馬に願いを託して奉納するようになったのである。これは、地方にも広く伝播することとなった。」という。さらに続けてみると、

「いまや私どもは、ほとんど勝手放題の願文を書いて『願かけ』をしている。交通安全・進学成就・縁談成就など。むろん、真剣な思いを託している人も多かろうが、ほとんどは、精進も潔斎もせずしての、もっとも簡便な願かけ行動ではなかろうか。これを『信仰の遊戯化』といっても過言ではないのである。

さらに、ひとつ、近年の変化がみられる。ほとんどの人が、願文の末尾に自分の名前を書いている。住所まで書いている例もある。

かつては、十二支と男・女を記すにとどまっていた。個人情報の保護が神経質なまでに唱えられている時代に、なんともおかしな逆行現象である。[注14]」

という説明に教えられたのだが、どうだろう。例えば、「信仰の遊戯化」という指摘に共感を覚えたのだが、もっと強調すれば「信仰」にも至らない「遊戯」には違いないであろう。それでいて「おかみをおそれぬ不届き者」（時代劇の〝上〟は〝神〟と違い、〝怖れ〟ても〝畏れ〟ない）でもなければ、「神を冒涜」するものでもないだろう。むしろ、身近な〝神様〟に対する共感覚の表出であり、素朴な親近感の露呈であろう。もっと追求してみれば、由来や由緒、仕来りも知らず、所作や作法にも慣れていない「求愛の傲慢さ」であり、「独断の自嘲化」である、と思うのだがどうだろう。

日本の多くの人々は、〝神様〟に関する由来や由緒をはじめ、ましてや教義を学んだり教えられたりすることはない。[注15]「八百万の神様」ゆえか、各社の開祖も宗祖も分からない。それぞれ「神話」はあっても、経典も教義もないのであろう。近年に至っては、神事に関する仕来りや所作を身につけるような暮らしから乖離しつつあり、すでに疎遠なのだから「遊戯化」するのも無理からぬのである。これがまた、「神ならぬ身」の浅はかな合理化の過程であり、求めてきた便利で進歩的な暮らしの実態であろう。「神は非礼を受けず」と承知しているが、時として「神も仏もない」と嘆きたくなり、時として「苦しいときの神頼み」ではないけれども、急場に立たされ、窮地に陥ることもあり、やり切れない思いに駆られる。多くの人々は、そうした状況を見越したり乗り越えようとしたりして神様に願いをかけ、祈る。だからなのだろう、江戸時代の誰が詠んだ川柳なのか、「神様も弱り果てる絵馬の数」という一句が、真実味を放って今に伝えられている、その理由とて理解されよう。

日本には〝八百万〟と目されているほどの〝神様〟が、一人ひとりの願いや祈りを叶えるべくして各地の各所に御座しますという。〝八百万の神様〟は、連日昼夜を分かたず多忙を極めながらも、人だけではなく、この世の動向を見つめておられることだろう。だから〝神様〟は、多くの人々の心に宿り、農山漁村や都市都会などという場所の違いや、民家やマンションの別なく祀られているという事実からして、〝八百万〟の数は、まんざら誇張でもないということを教えられたのだった。

（ちば　みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授）

〈注〉

（1）佐伯啓思『日本の宿命』（新潮新書　五〇二）のなかの、特に「第六章　開国という強迫観念」（一二〇頁以下）を参照した。

（2）「村祭」は明治四十五年三月発行の『尋常小学唱歌（三）』に発表された文部省唱歌。三番の歌詞は割愛した。

（3）『地域政策学事典』（勁草書房、八十七頁）によれば、平成十一年三月三十一日現在の市町村数は、三二三二であったのだが、平成二十二年三月三十一日現在では一七三〇となり、約半減したということである。

（4）三木清『人生論ノート』（新潮文庫）六十五頁。

（5）国分功一郎『来るべき民主主義』（幻冬舎新書　三一五）二〇四～二〇五頁にかけて引用した。

（6）宮沢賢治は「羅須地人協会」を立ち上げ、その理念を「農民芸術概論綱要」と題

してまとめている。このなかに「永久の未完成、これ完成である」という一文がある。

(7) 平成二十五（二〇一三）年五月四日（土曜日）付け「読売新聞」より写真と共に引用した。

(8) 「隅田川神社縁起記」より引用した。

(9) 注8に同じ。

(10) 「三囲神社」の「由来記」より引用した。

(11) 「牛島神社縁起」より引用した。

(12) 昭和三十八年（一九六三）に発売された「美しい十代」という流行歌。作詞　宮川哲夫、作曲　吉田正、歌　三田明。すでに遠ざかってしまった「十代」なので「〇代」とした。

(13) 淡島寒月は「文人。本名、宝受郎。号、梵雲庵。江戸日本橋生まれ。蒐書につとめ、西鶴の価値を紅葉・露伴に教え、小説を書き、画技に長じ、考古を好む。著「梵雲庵雑話」。一八五九～一九二六」。『新村出編　広辞苑　第四版』九十五頁。

(14) 神崎宣武『しきたりの日本文化』（角川ソフィア文庫）四十九頁、及び五十頁より引用した。

(15) 島田裕巳『神道はなぜ教えがないのか』（ベスト新書　三九五）のなかの、「第九章　神主は、要らない」とし、「仏教の僧は修行を実践するが、神主は儀礼の執行者である。」（一〇八頁以下）という説明に興味を覚えた。

附記　本誌『地域政策研究』第十六巻第三号に、筆者の拙稿も載せていただきましてありがとうございます。関係各位に御礼を申し上げます。

当拙稿は、今年度をもちまして御退職されます原田寛明先生の益々の御健勝と御活躍を祈念申し上げながら、御礼に代えられる何ものもありませんので、浅学を省みず謹んで捧げる次第であります。

原田先生には本学部の新設以来、同僚としてお近づきをいただいて参りました。時には先生より中央省庁の実務経験や学識の一部を拝聴し、御教示や御鞭撻をも賜りました。世の定めとは言え、在りし日を振り返り、感謝の意を込めて拙文を添える次第であります。

原田先生　長い間ありがとうございました。

千葉　貢　拝